

| | |
|-------|---------------------------------------|
| 団体名 | 望海地区在宅サービスゾーン協議会 |
| 活動テーマ | 「こどもからみた震災をこどもたちに伝え、さらに自分たちの町の防災を考える」 |



こどもが地域から分離している！ (3小学校 1138名)

| | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ①公園 15% ②夜這いの家 14% ③塾 7% ④コンビニ 3% ⑤習い事 7% ⑥学校の家で遊ぶ 25% ⑦自分の家で遊ぶ 23% ⑧その他 3% | <ul style="list-style-type: none"> ①公園 14% ②夜這いの家 14% ③塾 7% ④コンビニ 3% ⑤習い事 7% ⑥学校の家で遊ぶ 25% ⑦自分の家で遊ぶ 23% ⑧その他 3% |
|--|--|

学校が終わったらどこに行きますか？

家や学校で楽しいことはありますか？

勉強や学校の休憩時間が楽しみと答えるのがなんと多いことか！

もしも、学校以外でなにかあったらどうする？

阪神淡路大震災を経験した私たちは東日本大震災、熊本地震等次々と起こる地震を目の当たりにしながらもどこか人ごとのようにすぎていく。地域で年に1~2回防災訓練を行うが、ほとんどが形式的なものが多い。そんななかで、これまであまり注目されなかったこどもが学校以外で被災した場合はその小さな命をまもれるのだろうかとの課題に注目した。そこで、「釜石の奇跡」と言われた岩手県釜石市のこどもの活動がいかに生まれたかを明らかにし、あの災害の大混乱期にこどもたちはどのように過ごし、何を考えていたのか。そして、こどもだからこそできることがあり、こども同士だからこそ伝えられることがあるのではないかと考えから、この活動を進めていった。これをこどもだけでなく、より多くの人に理解していただけるように絵本や紙芝居で表すことにした。これまで東北の被災地や熊本地震の後のこどもたちの避難所での小さな活動が多く被災者を元気づけていたのをみてきた。そして、岩手県釜石の当時6年生で震災の時いち早く高台に逃げた寺崎さんに話を聞き、「学校で見た30センチで人が流されるビデオ」「放課後いつなるかわからない防災サイレンで訓練したこと」そして、避難するときと避難後も支えとなったのは「おかあさんとの約束」だったことはとても大きな防災教育の原点と考え、この話をもとに絵本にすることにした。この寺崎さんの話をもとに親子での日ごろからの震災に備える教訓、学校時間だけでなく、地域で生活しているときの防災に対する備えを地域ぐるみで行うことを提唱したい。また、被災当初から復興期にかけ、こどもだけでなく、母親も厳しい環境の中で耐え抜いてきた経緯がどの震災にもあった。「女たちの震災」、「子どもたちの震災」として、一人ひとりに震災時、震災後に物語があり、これを生きた教材にしていくことがこれから必ずどこかでは起きるであろう災害に備えて、救える命があると感じる。そして、今後もひろく子どもや親子、地域でこの本が活用され防災につながることを願っている。